

第16回 大賞(金の星賞)受賞作品

「弱虫鬼ごっこ」

岩手県立水沢高校三年 佐藤 紗香



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



賢治のまちから

高校生★童話大賞

大賞（金の星賞）

「弱虫鬼」つゝ

岩手県立水沢高等学校三年 佐藤 緑香

「理人は優しい子だねえ」

友人にからかわれ、いしめられて泣いていた僕を
そう言って抱きしめてくれた。

違うよ。こじめられても何も聞こ返せない、ただの蟲だもん

理人には優しいよたっていいしめでたすの悪口を言つたら、お前もいじめつ子と同じだからね

もう三つめの美鈴おばあちゃんは優しく頭をなでてくれた。僕は、そんなお

ばあちゃんが大好きだった。でも、何も言い返せず、おばあちゃんになぐさめてもらひ、とこができるな、自分が一番嫌いだった。

「よし、」の前の続きを聞かせてやろう。たしか、人に化けていたずらをする

る狐の話だったかな」

「そうそう。それで狐は最後、どうなっちゃったの？」

「やあやこやく続話を語る」やなにか、人に化けて悪をした狐にね

おばあちゃんは幽霊や妖怪などが登場する不思議な話に詳しい、やべいって話を聞かせてくれた。幽霊や妖怪が見える、と話した」ともあつたが、お母さんやおじいちゃんは「適当な」と言つて居ただけだ」とか「昔から不思議な人だつた」と笑つていた。でも、本当に見えているんじゃないかな、つて思つていた。

こうして僕、大内理人ははたから見たらオカルトマニアな小学四年生になつた。弱虫なのは相変わらずだけど、いじめられる」とはなくなつたため友達も増えた。おかげで平和な毎日を過ごすことができ、今日もいつも通り学校へ向かっていた。すると突然、後ろから誰かが僕の肩にぶつかつてくる。



ただ一人、今でも苦手な保育園の頃から一緒に真鍋光君だ。彼だけは今も僕のことが嫌いみたいで、いじめてくることはなかったものの、うして突つかかってくる」と多かったし、何より名前ではなく「弱虫」としか呼んでくれない。弱虫を治せない僕は、できれば光君とも仲良くなりたいのに、と苦笑いを浮かべるとしかできなかつた。

「う、うんね。一緒に歩いてもいい?」

「嫌だ。弱虫は足も遅いからな」

光君はそう言つて走り出してしまつた。僕は足が遅いので、足が速い光君には追いつかない。仕方ない、とその様子を眺めていると、段差につまづいてしまつたのが光君は思い切り転んでしまつた。

いや、そのはずだつた。

ゆっくりと起き上がり、と前を見た光君は、その先の光景に驚いている。僕もまた、その先の光景に目を奪われていた。

転んでしまつたはずの光君が、その先を走つていた。見間違いかと思ったが、ランドセルも、服装も、光君そのものだつた。

僕はあわてて光君のそばに駆け寄つた。光君はぼうぜんとしたまま、「光君」が走つていつた方を見つめていた。

「なあ、今、何が起つたんだ?」

僕は分からぬ、と首を横に振る。実際、「光君」はすぐにはなくなつてしまつたため会話することができない。すつきりしないまま、僕たちは学校へ向かつた。

学校に着くと、教室にはすでに「光君」がいて、クラスメイトと話をしていた。まるで自分が本物の光君であると見せびらかしているかのように。

「……ふさけんなよ」

光君の声は震えていた。そのまま教室の中に飛び込もうとしたのを、あわてておさへこむ。

「何で止めるんだよ。あいつをどうにかしないといけないの?」

「だめだよ、今行つたら大騒ぎになつちゃう」



光君は不満げに「ひかりを見ていたが、仕方ないとしどしどあやうりぬしてくれた。そして、姿を見られなことひひとまかトイレの個室に隠れる」といった。

「何で俺が一人いるんだよ。こんなの絶対ありえないはずだ」「僕も信じられないけど……少なくともこれは夢じゃないし、多分僕たちだけがどうこうできるものでもないよ」

「弱虫のくせに冷静だな。何か解決策でもあんのか?」

僕は光君の目を見てうなづく。実は、このことを解決してくれそうな人はすでに思いついていた。

「僕のおばあちゃんのところに行こう。おばあちゃんはいつも不思議な話に詳しいから、もしかしたら何か知ってるかも」

「……分かった。お前に助けられるのは気にくわないけど、今頼れるのはお前だけだからな」

光君はさつさと行こう、と歩き始めた。嫌われている僕の囁くことなんて聞いちやくれないと思っていただけに、光君の反応に驚きを隠せなかつた。僕はうん、とうなずきながら光君の後に続いた。

小学校からうつそりと抜け出し、十五分くらい歩いた先にあるおばあちゃんの家に無事辿り着くことができた。僕だけそぼりになつてしまつのでお母さんに怒られそうで怖いが、今はそのことは忘れるしかない。

チャイムを鳴らそうと手を伸ばすと、庭の方からおばあちゃんの声が聞こえてきた。ちょうど良かつた、とそちからの方へ向かう。

「おばあちゃん!」

「あら、理人じやないか。それとお友達かな。学校はどうしたんだい?」
おばあちゃんは洗濯物が干してある小さな庭の縁側に座つていた。しかし、不思議なことに話しだす相手はいなかつた。

「あれ、おばあちゃん、誰かと話してなかつた?」

おばあちゃんはきよとんとして一瞬視線をそらし、ああ、と何かを思つ出したような表情を浮かべた。

「気のせいじゃないかい? ひとまず、ソリソリ座りなさい」



おばあちゃんはそう言つて自分の右隣に座布団を一枚敷いた。不思議に思いつつもそこに座る。

「それで、どうして『』に来たんだい？ 今は学校の時間のはずだろ？」
「あのね、光君が転んだら、突然もう一人光君が現れたんだ。しかも、教室で他の友達と話をしていたんだ。それで、『』いう不思議な話ならおばあちゃんが何か知つてるんじゃないかなって」

そこまで一気に話すと、おばあちゃんは少し恵んでいるような表情を浮かべる。

「あいにくだけど、そういう話は聞いたことないねえ」

そつが、と一人で落ち込んでいると、

「ただ、解決できないわけじゃない。……理人、おばあちゃんの手を握ってくれるかい」

とおばあちゃんは手を差し出してきた。何だかうと思いつつその手を握つてみる。

その時、空氣がピリッとして張り詰めたような気がした。そして、田の前に「何か」が現れ、思わず叫び声を上げてしまった。

そこには鬼がいたのだ。

いかつい顔、頭に生えた角、僕よりもずっと大きな体、そして、右手に持つてある金棒。『』からどう見ても、間違いなく鬼だった。

僕はとっさに光君の手を握つてしまつた。

「おい何してんだよ気持ち悪いな……うわあああ！」

どうやら光君にも、鬼の姿が見えるようになつたらしい、驚きの声をあげていた。

「『』紹介するわね。『』から、『』の町に住んでる鬼吉やで」

「鬼吉だ。よろしくな」

僕たちはとまどいつつも続いて自己紹介をする。おばあちゃんは本当に妖怪が見えていたんだ、と僕はただただ驚いていた。

「おい美鈴、突然見せたりびっくりするだろ。もっと氣をつかつてやれ」

「確かに何の説明もなしに見せるのは良くなかつたわね。『』めんね、二人とも」



僕は気にしないで、と返事する。実のところ、今まで物語やおばあちゃんの話の中にしか存在しなかつた鬼が目の前にいることにわくわくしていた。

「ん？ おい光とかいったか、お前影がないぞ」

鬼吉さんは金棒を光君に向けながらそう言った。光君の周辺を見てみると、確かに影がない、ということに気が付いた。

「さつきの話から考えるに、こりゃ多分『影踏み鬼』の仕業だな」

「影踏み鬼？」

「ああ、あいつはよく人間にちよつかいをかける鬼でな。ときどき人の影に潜り込んでは転ばせ、そいつの姿になつて遊ぶんだ。今、光に影がないのは影踏み鬼が実体化しているせいだな」

「どうすれば元に戻せるんですか？」

「今朝からいろいろなことが起こつていたせいか、不思議なことにすんなりとその話を受け入れていた。

「光が影踏み鬼の影を踏むだけでいい。一番影が伸びる夕方がチャンスだ」思つたよりも簡単そうな方法だったので、ほつとため息をついた。光君の表情も安心しているように見えた。

「ただ少々問題があつてな。奴は本物よりもすばしっこいんだ。頭を使わないとすぐには捕まえられんだらうな。それと、一人でやらないと理人、お前が狙われる可能性もある」

その言葉で、再度頭を悩ませるはめになつた。僕は足が遅いから狙われたらすぐに捕まってしまうだろう。しかし、足の速い光君でさえ転ばれてしまつたのだ。光君だけで影踏み鬼を捕まえられるとはとても思えない。

「鬼吉さんは手伝ってくれないのかい？」

「すまない。」いつも現象には助言しかできないのがルールになつているんだ

鬼吉さんは申し訳なさそうな表情をうかべたあと、今度は真剣な表情で僕の方を向いた。

「……訳ありと言へば、お前の仲もそうみたいじゃないか。二人の仲はあまり良くない感じに感じる」

僕たちはぎくっと肩を震わせた。鬼吉さんはそんなことまで分かつてしもうのか、と感動と共に恐怖も覚えた。

「俺としては理人が光を助ける理由もないと思うんだよな。無理する必要はないんだぞ」

鬼吉さんのその言葉に光君の顔から血の気が引いていくのが分かつた。光君から一方的に嫌つてゐるのだからそうなるのも当然だろう。

それに、僕には光君を助けるメリットはないし、むしろ危険に自分から突つ込むことになる。そう考へると、僕は光君を助けるのが怖くなつてきた。ああ、結局僕は弱虫なんだな、と情けなくなつてくる。

「理人、惑わされるんじゃないよ」

おばあちゃんの凛とした声がその場に響き渡つた。

「でも、僕は弱虫だから、怖いんだ」

「理人は優しい子だろ？ その優しさが勇気につながるはずさ。おばあちゃんは、信じているよ」

今度は昔、慰めてくれた時のような優しい声で語りかけてきた。その声で落ち着きを取り戻し、僕は改めて考えた。

僕が狙われるかもしれないのは、確かに怖い。でも、ここで光君を見捨ててしまつたら後悔するような気がするし、いつまでも、「弱虫」のレッテルを貼られるまではいけないと、そう思った。

「……僕は光君の助けになりたい」

僕ははつきりとした口調で、光君に向かつて言った。

「本当にいいのか。俺は今までお前をつっぱねてきたんだぞ」

光君は不安そうに尋ねてくる。

「いいんだよ。」ここで逃げたらかっこわるいしね。それに僕ね、光君と友達になりたいんだ」

僕はこつと笑いかけた。すると光君は目を見開き、そっぽを向いた後、小さくありがとう、と呟いた。

「全く、余計なことを吹き込んでやつて」

おばあちゃんが鬼吉さんに文句を呟いた。

「がはは、なに、覚悟があるか試したのさ。でもま、その様子なら大丈夫だろうな。お詫びに一つ、奴の弱点を教えてやる」

鬼吉さんは豪快に笑つて続けた。



「あいつはそんなに頭が良くないから、はやみうちなんかされたり、行き止まりに追いつまれたり困るだらうな。普段はいいままで言わないからな、サークルだ」

僕たちはありがとうございます、と鬼吉さんに向かってお辞儀をする。頑張れよ、と優しい声をかけてくれた。そしてそのまま、鬼吉さんは住んでいる山へ帰つていった。僕たちは夕方までおばあちゃんちで作戦会議をしながら待つことにした。

そして夕方。いよいよ作戦実行だ。影踏み鬼はどうやら一人で下校しているようなので、捕まえるには絶好のチャンスだった。

「ひ、光君、ちよつといいかな？」

僕は意を決して影踏み鬼に話しかけた。

「理人、どうしたんだ。お前、学校に来なかつただろ？」

僕のことを理人、と呼んだので、ああ、本当にニセモノなんだなあと改めて実感した。どうやら完璧かんぺきになりきるのひとはできないらしい。

「うん、あのね……」

そこまで言いかけたところで急に怖くなつてしまい、黙つてしまつた。これから戦うのは人間じゃなくて鬼だ、と思うとまく体が動かない。でも光君を助けなきや、僕が頑張らなくちや、と言い聞かせ、僕はがつしりと光君をあやえこんだ。その瞬間、近くの電柱の陰に隠れていた光君が影踏み鬼の影めがけて走つてくる。

「光君の影に戻つてほしいんだ！」

そう言つた瞬間、影踏み鬼に振りほどかれ、僕は尻もちをついてしまつた。影踏み鬼はすかさずその場から走り出す。

「ちつ、もう仕掛けできやがつたか。でも、この俺に追いつくことができるかな？」

影踏み鬼はけたけたと笑いながら走つていぐ。僕たちも後を追つて走り出した。

影踏み鬼は公園のグラウンド側に逃げ込んだ。入つてすぐこちらを振り返り、僕を指差す。

「お前、気にくわない。今度はお前になつてやるよ」



そう言つて僕めがけて走つてきた。当然僕は逃げ始める。「みあげて／＼恐怖を抑えながら、どうにか影を自分の後ろに伸ばさないよつに方向を変えつつ、追いつかれないように全力で走るのは大変だつた。

しかし、影踏み鬼の方が足が速いため、すぐに追いつかれ、左肩をつかまれてしまつ。そこはグラウンドのすみつゝにある水飲み場の近くだつた。影は、そちうの方に伸びてゐる。

「おとなしくしてろよ。すぐに影を踏んでやるから」

影踏み鬼は相変わらずけたけたと笑つてゐる。僕はその様子がおかしくて、思わず笑つてしまつ。

「氣味が悪いな。どうして笑つてゐる?」

「だつておかしいんだもん。僕／＼はめられて／＼と氣付いてないんだから!」

僕は一步、左側へ移動した。その瞬間、影踏み鬼の影が水飲み場の方へ伸びていく。そして、水飲み場の陰から光君が飛び出した。

「しまつた!」

影踏み鬼は慌てて後ろに逃げ出だが、その影は無防備にさらされていた。そして、光君はすぐにその影に追いつき、力強く踏みしめた。

「——捕まえた!」

影踏み鬼は悲鳴を上げながら、地面に吸い込まれていく。やがて完全に吸い込まれ、光君の足元には長い影が伸びていた。

「これで、大丈夫なのかな?」

僕は疲れと安心からその場にへたれこんだ。光君も疲れているようだつたが、安心しているような、やりきつたような、そんな表情だつた。

「ありがとうな。その、まあ、少しは見直したよ。……理人」

最後の方は消えそうなほど小さな声だつた。僕は思わず目を見開く。「えつ今、名前で呼んでくれた? もしかしてまだ影踏み鬼が……?」

「ああもうつるさいな! 何でもいいだろ!」

光君はそのまま公園の出口へと向かつていく。今度は置いて行かれないよう、光君の後を追いかけた。



それからとこつもの、一度不思議な現象に触れてしまつたからなのか、ときどき幽霊や妖怪が見えるようになつてしまつた。おばあちゃんや鬼吉さんにむやみにそういうものに觸わるな、と言われているが、もし友達になれるならなつてみたいな、と思つ。

もう一つ、変わつたことがある。光君に弱虫と呼ばなくなつたこと。そして、前よりも仲良くなれたこと。

今日も、おばあちゃんと鬼吉さんに話を聞きに行へたのに、光君と影踏み鬼を捕まえた公園で待ち合わせをしていた。

「おまたせ、待つた？」

「いや、待つてはいない。いないんだけどな」

光君はそう言つと足元を指差す。何だかうと思つてその方向を見ると、光君の影から黒くて丸い何かが飛び出していた。

「よ。あんとおは世話になつたな」

「もしかして、影踏み鬼？」

その黒いものは、くどくどなずく。

「さすがにもう乗つ取りはしないけどな、こつちもやられてるばつがじや悔しいから、こいつの影に住むことにしたわ。まあ、よろしくな」

「よろしくじゃない、こつちは迷惑なんだ。鬼吉さんに追いついてもらつたらな」

僕は目を丸くして光君と影踏み鬼の言い合ひを眺めていたが、何だかだんだんと笑いがこみあげてきた。

「……ふつ！ あはははは！」

「何だよ、笑つてんじゃねえよ……ふつ、ははは！」

いつのまにか、影踏み鬼も含めて三人で笑いあつていた。

こんな不思議な出来事がこれからも続くのかなと胸をおどりせながら、僕たちはおばあちゃんちへと向かうのだった。